

The Glass Menagerie 試論

中 地 晃

The Glass Menagerie (以下 *Menagerie* と略す) は1944年12月26日に Chicago の Civic Theater で初演された。⁽¹⁾ 製作・監督は Eddie Dowling で、Tom の役を兼ね、Laurette Taylor が Amanda を、Julie Haydon が Laura を、Anthony Ross が Jim を演じた。舞台装置と照明は Jo Mielziner が担当し、Paul Bowles が作曲した音楽を用いた。

寒さのためか観客の入りは悪く、Dowling と共同製作者の Louis J. Singer は一週間後に打ち切りを覚悟した。しかし批評家の評判はよく、Claudia Cassidy, Ashton Stevens, Henry T. Murdock 等が新聞の演劇欄で、まれに見る傑作を Chicago で殺してはならないと訴えた。その結果第三週目の週末には満員の観客を集めることが出来た。St. Louis の *Star-Times* の娯楽欄担当の記者だった William Inge は Chicago に来てこの劇を見て感動し、劇作家になる決意をするのである。

Menagerie の New York 公演は1945年3月31日に Playhouse Theater で幕を切った。配役は Chicago 公演の場合と同じだったが、Amanda 役の Laurette Taylor は特に好評で、公演は大成功だった。それは1946年8月まで561回公演され、New York Critic's Circle Award を始め、Catholic Monthly Award, Sidney Howard Memorial Award を受賞した。

Laurette Taylor は Amanda の役を最後として1946年に死ぬが、*Menagerie* は Paline Lord を Amanda として Pittsburgh で公演され、1948年7月には London と Brighton で Helen Hayes を Amanda として公演された。それは1956年に revival されたが、1961年の春には Helen Hayes の率いる劇団は国務省の後援でヨーロッパと中近東の15週間の旅興業に出た。Madrid, Rome, Vienna, Ankara, Tel-Aviv, Athens, Beirut, Berlin, Stockholm, Helsinki, Copenhagen, Paris などで公演し、さらに南米の各地で公演した。1965年5月には Maureen Stapleton が Amanda 役で Broadway で公演され、1975年には同じ Maureen Stapleton が Amanda 役で Square Theater で公演された。

Menagerie は1973年12月16日に ABC テレビで放映された。Katharine Hepburn が Amanda, Sam Waterston が Tom, Joanna Miles が Laura, Michael Moriarty が Jim を演じた。

映画としては、1950年に Gertrude Lawrence が Amanda 役で製作されたが、喜劇として変更が多く、Tennessee Williams はもっともひどい茶番劇だと言ったといわれる。

(1)

Menagerie の上演において最も重要な役は Laura の役ではなくて母親 Amanda の役である。初演が好評だったのは、Amanda 役の Laurette Taylor の演技に負うところが大きいと言われる。(2) 作品のもととなった(3) “Portrait of a Girl in Glass” は Tom の語る Laura の思い出が中心で、Amanda は Laura を business college へ行かせたこと、Laura がそこへ行っていないことを知って Laura を責めること、Tom に男友達を連れて来るように言うこと、dinner のために準備をすること、Jim と会話をすること、Jim が婚約していることを知って Jim の帰った後で Tom を責めることなど、筋を作る主な出来事に関与する様子が描かれるが、中心はあくまで Laura であって、作品の大半は Laura の描写や Laura を含む場面にあてられている。

しかし、*Menagerie* では Amanda と Tom の場面が多く、Jim と Laura の第七場を除いて、Amanda は全部の場に出演している。Amanda の語る台詞は一番多く、*Menagerie* は Amanda を中心とする劇であると思われるほどである。

Amanda は悲劇のヒロインであって、その悲しい姿は作品の最後の場面に見事に描かれる。Tom の連れて来た Jim がすでに婚約していることがわかり、Laura を結婚させようという夢が消えて、Amanda の苦労は水泡に帰し、彼女はその怒りを Tom にぶつける。

“...The effort, the preparations, all the expense! The new floor lamp, the rug, the clothes for Laura! All for what? To entertain some other girl’s fiancé!”

“...Then go to the moon—you selfish dreamer!(4)”

Amanda のこの言葉に続くト書きで、Amanda が Laura を慰めている場面が、Tom がドアを閉めて出て行ったため、ガラス越しのパントマイムで示されるが、Laura を愛しての戦いに破れた Amanda の姿には、作者も書いているように、(5) 威厳と悲劇的な美しさがある。

(...Amanda appears to be making a comforting speech to Laura who is huddled upon the sofa. Now that we cannot hear the mother’s speech, her silliness is gone and she has dignity and tragic beauty. Laura’s dark hair hides her face until at the end of the speech she lifts it to smile at her mother. Amanda’s gestures are slow and graceful, almost dance-like, as she comforts the daughter. At the end of her speech she glances a moment at the father’s picture—then withdraws through the portieres....)(6)

Amanda に対する観客の同情は彼女の子供達への愛情の強さから生れている。Laura を business college にやったのも、Laura を自立させたいと思うからであり、Laura を結婚させようと思うのも、Laura の生きる道について思いを巡らすからである。彼女は厳しい現実を見ているのである。

“...I know so well what becomes of unmarried women who aren't prepared to occupy a position. I've seen such pitiful cases in the South—barely tolerated spinsters living upon the grudging patronage of sister's husband or brother's wife!—stuck away in some little mouse-trap of a room—encouraged by one in-law to visit another—little birdlike women without any nest—eating the crust of humility all their life!”(7)

Amanda は Famous and Barr というデパートで実演販売をやったり、婦人雑誌の講読を勧誘したりして働きながらも、Laura の将来を心配し、Tom が真面目に働いていないことにもいらだっている。Tom には食事はよく噛めとか、煙草を吸いすぎるなとか、ローレンスの書いた汚らしい本を持ち込むなとか、夜の帰りが遅く会社ではろくな仕事が出来ないとか言って喧嘩となるが、それもすべて愛情から出ている。

“...In these trying times we live in, all that we have to cling to is—each other....”(8)

Amanda は realistic であるが、現実に盲目になる場合がある。“Portrait of a Girl in Glass”では a relatively aggressive sort of woman と書かれる彼女は gentleman caller をわが事のように重要視して部屋を飾り、Laura に新しい服を着せ、自らも昔の少女時代の服をきて、gentleman caller を迎えるが、Amanda は Laura がその男と結婚出来ると思い込んでいる。Tom はそれをたしなめる。

TOM Mother, you mustn't expect too much of Laura.

AMANDA What do you mean?

TOM Laura seems all those things to you and me because she's ours and we love her.

We don't even notice she's crippled any more.

AMANDA Don't say crippled! You know that I never allow that word to be used!

TOM But face the facts, Mother. She is and—that's not all—(9)

Jim に婚約者がいることがわかり、Amanda は Tom を責めるが、感情的で理不尽な言葉は彼女の怒りと絶望をよく表わしている。

AMANDA It seems extremely peculiar that you wouldn't know your best friend was going to be married!

TOM The warehouse is where I work, not where I know things about people!(10)

“Portrait of a Girl in Glass”では、Tom だけでなく Laura も Amanda と反対の立場に立つ。

“I thought you called him your best friend down at the warehouse?”

“Yes, but I didn't know he was going to be married!”

“How peculiar!” said Mother. “How very peculiar!”

“No,” said Laura gently, getting up from the sofa.

“There’s nothing peculiar about it.”⁽¹¹⁾

このような点において Amanda は silly と考えられるようである。作者もそれを認め、⁽¹²⁾ Amanda の役を演じた Laurette Taylor も次のように言っている。

“You notice these bangs I wear? I have to wear them playing this part because it’s the part of a fool and I have a high, intellectual forehead.”⁽¹³⁾

しかし子供に対する盲目的愛情は、その愛の強さを示すものであり、そのための絶望は silly というべきではなく tragic と見るべきではなかろうか。Amanda は Tom の去った後、Laura を守って “Spartan endurance”⁽¹⁴⁾ を必要とする人生を生き抜こうとしているのである。

父に似て来て家出の様子のある Tom をひきとめ、ガラス細工と古レコードに逃避している Laura を何とかしようと必死になる Amanda が、Laura を business school に入れて失敗し、結婚させようという努力にも敗れ、しかも、何回かの哀願にもかかわらず Tom に去られて、Laura と二人だけの人生に直面している姿は、この章の始めに述べたように、悲劇のヒロインの姿であり、現実の風の冷たさを実感させるのである。現実に翻弄される女性の悲劇という自然主義的題材をわれわれは Amanda の物語に見出すのである。

(2)

Amanda が貧窮の中であって Laura を愛して行く姿は観客の同情をよぶが、Amanda の輝ける青春の思い出は現実逃避の面を持ちながら現実の厳しさを際立たせる。Blue Mountain におけるある日曜日、17人もの gentlemen callers を持ったことは今は彼女のすぎる夢である。

“One Sunday afternoon in Blue Mountain—your mother received—*seventeen!*—gentlemen callers!...”

“...Among my callers were some of the most prominent young planters of the Mississippi Delta—planters and sons of planters!”

“There were young Champ Laughlin who later became vice-president of the Delta Planters Bank....”

“...But—I picked your father!”⁽¹⁵⁾

第一場で何回目かに語られるこの思い出は、第六場で Amanda が Jim を迎えるのに少女時代の服を着て登場する時、さらに輝きを増す。

“This is the dress in which I led the cotillion, won the cakewalk twice at Sunset Hill, wore one spring to the Governor’s ball in Jackson!...

I wore it on Sundays for my gentlemen callers!

I had it on the day I met your father—
 ...Evenings, dances!—Afternoons, long, long rides!
 Picnics—lovely!—So lovely, that country in May.—
 All lacy with dogwood, literally flooded with jonquils....”(16)

マントルの上にかけている子供の父の大きな写真は華やかな Amanda の過去の象徴である。Amanda は家出してしまった子供の父をかつては愛していたのである。

“...I've never told you but I—loved your father....”(17)

華やかな青春を持っていたという点で, Amanda は *A Streetcar Named Desire* の Blanche と同じであり, Blanche が Flamingo ホテルの売春婦に転落していったように, Amanda は夫に逃げられ, St. Louis の場末のアパートで自閉症に近い Laura と放浪に憧れる Tom と暮す状況に追い込まれているのである。前述した最後の場面における Amanda の悲劇的な姿には, 北部産業主義に翻弄された上品と繊細と教養の象徴である南部女性の姿があり, 華やかな過去の思い出が Laura と Tom に悩まされる Amanda の現実と対照されて, それが作品に象徴的な拡がりを与えているのである。

(3)

Menagerie において Amanda の悲劇の与える感動は大きい, 同情をかきたて詩情を漂わせるのは Laura の物語である。Tom の回想として描かれるこの劇は Tom の narration で終るが, この劇のもととなった “Portrait of a Girl in Glass” におけると同様, Tom の最後の言葉は, この作品の中心が Laura であることを明示している。旅空の Tom の心を離れない Laura の姿を Tom は悲しく思い出すのである。

“...Not long after that I was fired for writing a poem on the lid of a shoe-box.

I left Saint Louis. I descended the steps of this fire-escape for a last time and followed, from then on, in my father's footsteps, attempting to find in motion what was lost in space—

I traveled around a great deal. The cities swept about me like dead leaves that were brightly colored but torn away from the branches....Perhaps I am walking along a street at night, in some strange city, before I have found companions. I pass the lighted window of a shop where perfume is sold. The window is filled with pieces of colored glass, tiny transparent bottles in delicate colors, like bits of a shattered rainbow.

Then all at once my sister touches my shoulder. I turn around and look into her eyes...

Oh, Laura, Laura, I tried to leave you behind me, but I am more faithful than I intended to be!...Blow out your candles, Laura—and so good-bye....”(18)

Tom の心をはなれない Laura の思い出が、詩的リズムを持った詩的言語で悲痛な叫びとして語られるが、Londré もふれているように、⁽¹⁹⁾ 無力で保護さるべき Laura を見捨てた悔恨を秘めた愛情が Tom の心に存在している。

薄暗い部屋でガラス細工の動物をみがいたり、光にかざしたり、古い蓄音機で古いレコードを聞いて日々を過す Laura, 足が悪く、ブレースをつけている劣等感から高校を中退する Laura。母親の申し込んだ business college のスピードテストに耐えられずやめてしまい、学校へ行くふりをして美術館、動物園、映画館、熱帯植物の温室で時間を潰していた Laura。結婚の夢をふと抱かせた Jim にすでに恋人がいることを知って茫然とする Laura。

Menagerie のもととなったといわれる “Portrait of a Girl in Glass” では Laura について、彼女が世間に対し積極的な行動をしないと説明される。

...She made no positive motion towards the world but stood at the age of the water, so to speak, with feet that anticipated too much cold to move....⁽²⁰⁾

母親 Amanda も Laura の現実を見据えている。

“...I put her in business college—a dismal failure! Frightened her so it made her sick at the stomach.

I took her over to the Young People’s League at the church. Another fiasco. She spoke to nobody, nobody spoke to her. Now all she does is fool with those pieces of glass and play those worn-out records....”(21)

そして Amanda は Tom に Laura の面倒を見るように頼むのである。

“I mean that as soon as Laura has got somebody to take care of her, married, a home of her own, independent—why, then you’ll be free to go wherever you please, on land, on sea, whichever way the wind blows you!

But until that time you’ve got to look out for your sister....”(22)

Amanda の頼みを無視して放浪の旅に出た Tom の心には、Laura が現実社会に生きるにはあまりに内気で、あまりに繊細であることを知り過ぎるほど知っている故に、子供を棄てた親と同様、Laura に対する愛情と自らの行為に対する後悔が渦巻くのである。Laura に対する Tom の感情の奥底には、作者自身の姉 Rose に対する作者の愛と悔恨の情があるように思われる。⁽²³⁾

Laura の物語は、現実の嵐の中に漂う小舟のような弱者の運命を描いており、弱者に対する作者の同情は、非人間的な現代社会に対する抗議なのである。

(4)

Laura は確に無力な保護さるべき少女として描かれている。しかし、Williams は Laura を幻想の中の美少女として描こうとし、それに成功していることは見逃がしてはならない。第七場のト書きには Laura の美しさが書かれている。

As the curtain rises Laura is still huddled upon the sofa, her feet drawn under her, her head resting on a pale blue pillow, her eyes wide and mysteriously watchful. The new floor lamp with its shade of rose-colored silk gives a soft, becoming light to her face, bringing out the fragile, unearthly prettiness which usually escapes attention.⁽²⁴⁾

Tom が電気料を流用してしまったために、Jim の訪問中に電気が消え、ろうそくの火の下で Jim と Laura は語り合うが、Jim も Laura の美しさを口にする。

“Has anyone ever told you that you were pretty?...”

“Well, you are! In a very different way from anyone else.

And all the nicer because of the difference, too....”⁽²⁵⁾

“...They’re common as—weeds, but—you—well, you’re—*Blue Roses!*”⁽²⁶⁾

“In all respects—believe me! Your eyes—your hair—are pretty! Your hands are pretty!”⁽²⁷⁾

Laura は美しいだけではない。愛情が深い少女なのである。第一場で Amada が Blue Mountain の話を始める時、Tom が「またか」と言うのをおさえて、“But let her tell it.”とか“*She loves to tell it.*”と言うのは、母 Amanda を愛しているからであり、第四場の朝帰りのトムを迎え、Amanda と仲直りするように言うのも、Amanda にも Tom にも愛情をもっているからである。さらに Laura が Tom のことを心配して泣いている様子は胸を打つものがある。Amanda は言う。

“You know how Laura is. So quiet but—still water runs deep! She notices things and I think she—broods about them.... A few days ago I came in and she was crying.”

“...She has an idea that you’re not happy here.”⁽²⁸⁾

“Portrait of a Girl in Glass” では Tom は Laura と話をするのは慰めであると言う。

After work at the warehouse or after I’d finished my writing in the evening, I’d drop in her room for a little visit because she had a restful and soothing effect on nerves that were worn rather thin from trying to ride two horses simultaneously in two opposite directions.⁽²⁹⁾

実際 Laura は内気で繊細で限りないやさしさを持った人物として描かれている。Jim の訪問はこの劇の筋の構成において中心的な出来事と考えられるが、高校時代に淡い思いを寄せていた

Jim に劣等感を捨てるように励まされて、ふと燃え立つ気持が、Jim が結婚相手が決っているために冷やされても、じっと耐えるのである。彼女の心理はト書きの動作の指示で表現される。

(Leaning stiffly forward, clutching the arm of the sofa, Laura struggles visibly with her storm....)⁽³⁰⁾

(The holy candles in the alter of Laura's face have been sunffed out. There is a look of infinite desolation.)⁽³¹⁾

(She bites her lip which was trembling and then bravely smiles....)⁽³²⁾

Laura は苦しみを克服し、角のとれた一角獣をみやげとして Jim に渡すのである。

このように美しく、思いやりのある Laura を弁護する立場で見れば、彼女が business college をやめたことは、彼女の繊細な感情を示すものであり、ガラス細工をみがいたり、古いレコードを聞いて日々を過していることは、現実からの逃避という点で、現実の厳しさを示す反面、現実を超えた幻想美の世界を目指す姿と受けとめることが出来るのである。詩人の Tom が Laura に惹かれるのは、Laura に自分と同様な、超現実の美を求める人間の悲しい姿を見るからである。家出をする父も Tom も現実逃避と言われることが多いが、少くとも Tom の場合は、倉庫勤めと映画に行く退屈な日々を棄てて、詩を書くために放浪の旅に出たのであり、その行動は積極的であったのである。Jim が Tom に職を失わないように目を覚ませと言った時、Tom は積極的な決意を述べる。

"I'm starting to boil inside. I know I seem dreamy, but inside—well, I'm boiling!—Whenever I pick up a shoe, I shudder a little thinking how short life is and what I am doing!—Whatever that means, I know it doesn't mean shoes—except as something to wear on a traveler's feet!..."⁽³³⁾

Tom は Jim に対し強がりを行っているのではない。早くも第三場で会社がいやだから家を出たいとあって、Amanda を困らせる。

"...You think I am in love with the Continental Shoemakers?...Look! I'd rather somebody picked up a crowbar and battered out my brains—than go back mornings!...For sixty-five dollars a month I give up all that I dream of doing and being ever!..."⁽³⁴⁾

第四場でも Tom は冒険に出たいと言う。

"I like a lot of adventure."⁽³⁵⁾

"Man is by instinct a lover, a hunter, a fighter, and none of those instincts are given much play at the warehouse!"⁽³⁶⁾

Tom は詩を書きたいのである。第六場の narration で Tom 自身が語っている。

"...He [Jim] knew of my secret practice of retiring to a cabinet of the washroom to

work on poems when business was slack in the warehouse. He called me Shakespeare....”(37)

このような Tom にとって Laura が憐憫の対象であると同時に、自らの求める詩の世界の幻想美の象徴となっていることは確かである。薄暗い部屋でガラス細工を光にかざしている Laura, 古いレコードに聞入っている Laura, 淡い恋も諦めてさびしく微笑む Laura。 *Menagerie* において Laura の物語は、現実の苛酷な生活に翻弄される詩人的精神の悲しい運命を描いているのであり、Laura は Tom の心の、そして観客の心の理想美の象徴として幻想の中に浮び上るのである。

(5)

Menagerie は自然主義の作品に見られるような環境に翻弄される人物を描いているが、その描き方は realistic ではない。作者も言うように、回想劇として組立て、印象の強さを優先しているのである。第一場のト書きは重要である。

The scene is memory and is therefore nonrealistic. Memory takes a lot of poetic license. It omits some details ; others are exaggerated, according to the emotional value of the articles it touches, for memory is seated predominantly in the heart. The interior is therefore rather dim and poetic.(38)

Williams は現実の人生を描こうとしたが、それを感動的に描こうとしている。drama で重要なのは観客の心を動かすことであり、そのために音楽や照明についても細かい指示が与えられている。“The Glass Menagerie” という曲を適切な場所で何回も用いるように言うが、それが遠くでぼんやりしている時に聞くようなサーカスの音楽のようなものと指示される。それは世界でもっとも delicate で悲しい曲であるなどと細かい指示が Production Notes に書かれているが、照明についても realistic であってはならず、回想の雰囲気を与えるために、先づ薄暗い必要があると言う。Tom と Amanda の喧嘩の場面では、関係のない Laura に光を当てるように指示が与えられ、El Greco の宗教画の光の使い方をするのが効果的だと述べられる。Screen Device についても指示がある。これは image や title を投影した screen の使用である。これは Eddie Dowling や Gassner 等の演出家が余分だとして用いなかったが、(39) 作者が劇的な感動を与えることに如何に力を入れたかを示すものである。作者は narrator の Tom が言うように幻想の中で真実を与えようとしているのである。

“Yes, I have tricks in my pocket, I have things up my sleeve. But I am the opposite of a stage magician. He gives you illusion that has the appearance of truth. I give you truth in the pleasant disguise of illusion....”(40)

(6)

Menagerie は照明・音楽の助けにより深い感動を与える drama となっているが、中心はそこに語られる物語であり、回想の幻想的な雰囲気の中で Wingfield family の人々の夢と絶望が描かれる。電話会社に勤めていたが、家族を棄てて家出をした父親、父親の後を追うように冒険を求めて出て行く Tom、現実に背を向けて美の世界へ浸る Laura、青春の夢にすがって現実に耐える Amanda—それぞれが現実生活の厳しさを実感させる。第一場に描かれるアパートの様子は厳しい現実の象徴である。

The Wingfield apartment is in the rear of the building, one of those vast hive-like conglomerations of cellular living-units that flower as warty growth in overcrowded urban centers of lower middle-class population and are symptomatic of the impulse of this largest and fundamentally enslaved section of American society to avoid fluidity and differentiation and to exist and function as one interfused mass of automatism.⁽⁴¹⁾

これはまさに現代工業社会の大都会の窒息するような生活の場であり、そこにあるものは人間の絶望である。

The apartment faces an alley and is entered by a fire-escape, a structure whose name is a touch of accidental poetic truth, for all of these huge buildings are always burning with the slow and implacable fires of human desperation.⁽⁴²⁾

その絶望から脱出したのが父親であり、Tom であり、絶望から逃避しているのが Laura であり、過去の夢にすがってかろうじて絶望に耐えているのが Amanda であることを考えれば、*Menagerie* は現代産業主義社会の非人間的な状況を告発した作品であると言うことは可能であり、Laura と Tom の姿には現実の醜悪を超えて美の世界を求める人間精神の状況が象徴され、さらに Amanda の姿には北部の産業主義に南部の優雅さ上品さが敗れていく状況が象徴されるのである。

表現主義と新しい技法は真実へより接近するためだと Williams は Production Notes で述べているが、*Menagerie* では象徴的な人物・行動・背景が詩的 image の豊かな言葉で表現され、音楽・照明でその与える感動が高められているのである。

注

- (1) cf. Felicia Hardison Londré, *Tennessee Williams*, pp. 73-77.
cf. Nancy M. Tischler, *Tennessee Williams: Rebellious Puritan*, pp. 110-116.
cf. C. W. E. Bigsby, *A Critical Introduction to Twentieth-Century American Drama*, pp. 50-52.
- (2) *Tennessee Williams, Memoirs*, pp. 85-86.
- (3) *Ibid.*, p. 120.

- (4) Tennessee Williams, *Sweet Bird of Youth and Other Plays* (Penguin Plays), p. 312.
- (5) *Ibid.*, p. 312.
- (6) *Ibid.*, p. 312.
- (7) *Ibid.*, p. 245.
- (8) *Ibid.*, p. 258.
- (9) *Ibid.*, p. 271.
- (10) *Ibid.*, p. 311.
- (11) Tennessee Williams, *One Arm and Other Stories* (A New Directions Book), p. 111.
- (12) *Sweet Bird of Youth and Other Plays*, p. 312.
- (13) *Memoirs*, p. 85.
- (14) *Sweet Bird of Youth and Other Plays*, p. 259.
- (15) *Ibid.*, pp. 238-239.
- (16) *Ibid.*, p. 276.
- (17) *Ibid.*, p. 259.
- (18) *Ibid.*, p. 313.
- (19) Londré, *Tennessee Williams*, p. 68.
- (20) *One Arm and Other Stories*, p. 97.
- (21) *Sweet Bird of Youth and Other Plays*, pp. 261-262.
- (22) *Ibid.*, p. 261.
- (23) *Memoirs*, pp. 116-127.
- (24) *Sweet Bird of Youth and Other Plays*, p. 288.
- (25) *Ibid.*, p. 304.
- (26) *Ibid.*, p. 304.
- (27) *Ibid.*, p. 304.
- (28) *Ibid.*, p. 259.
- (29) *One Arm and Other Stories*, p. 102.
- (30) *Sweet Bird of Youth and Other Plays*, p. 307.
- (31) *Ibid.*, p. 307.
- (32) *Ibid.*, p. 307.
- (33) *Ibid.*, p. 283.
- (34) *Ibid.*, pp. 251-252.
- (35)(36) *Ibid.*, p. 260.
- (37) *Ibid.*, p. 273.
- (38) *Ibid.*, p. 233.
- (39) Tischler, *Tennessee Williams*, p. 103.
- (40) *Sweet Bird of Youth and Other Plays.*, p. 234.
- (41) *Ibid.*, p. 233.
- (42) *Ibid.*, p. 233.